

2025/12/11 16:00—

少子化対策の不都合な真実

山田昌弘 Masahiro Yamada

(中央大学・文学部・教授)



1. 少子化が深刻化する日本の現実

* 地方で深刻化する少子化、離婚の増大

* **地方の出生数急減は深刻** 東京区部は出生数は維持
都道府県別、出生数の推移 2000年と2024年の比較

	全国	東京都	東京区部	神奈川県	沖縄県	宮崎県	青森県	秋田県	福山市
• 2000年	119万	100209	65224	82906	16773	11037	12920	9007	4054
• 2024年	69万	84207	61449	51423	11753	6000	5099	3282	3053 (※)
減少率	42%	16%	6%	38%	30%	46%	61%	64%	25%

* **地方での離婚の急増**

2024年	全国	青森県	秋田県	東京区部	神奈川県	福山市(※)
①婚姻件数	49万	3313	2247	61219	39586	1766
②離婚件数	19万	1752	1043	14786	13202	749
離婚割合	39%	53%	45%	24%	33%	42%

(離婚割合：①婚姻件数に対する、②離婚件数の割合)

※人口動態では都道府県・政令市のみ2024年の値が公表されているため、直近の公表値である2023年の値を記載

1. 少子化が深刻化する日本の現実

- * 日本で少子化が問題として認識されたのは、1990年代
1990年「1.57ショック」 — 1989年の 合計特殊出生率 戦後最低
1992年「少子社会の到来」『国民生活白書』（経済企画庁）
— 「少子」という言葉が始めて公的に使われる
- * 30年間少子化を放置した結果、子ども数の急減が起きる
少子化が始まった当初は子ども数はあまり減らない
30年が一世代に当たる
少子化で子ども数少なくなっている世代が、出産適齢期を迎えはじめる
(団塊ジュニア世代1970年代前半生まれ—約200万人(年)規模 が50歳に到達して出産年代から外れる)

1. 少子化が深刻化する日本の現実

* 日本の少子化の直接要因

未婚化の進展 結婚していない人の増大

結婚している人はだいたい2人産み育てている

* 30年前から、四分之三が結婚し二人産み、四分の一が未婚という構造は変化していない。

= 合計特殊出生率 1.2－1.5の間を上下

* 未婚者の大部分は、結婚したいと思う(思っていた) 低下傾向

2021年出生動向基本調査 男性81.4%、女性84.3%(未婚者)

では、なぜ結婚が減っているのか

1. 少子化が深刻化する日本の現実

■ 少子化問題の「不都合な真実」

- * 収入の不安定な男性が結婚相手として選ばれない
- * 日本では、結婚が出産の前提である
- * 収入が安定した男性の人数は減少し、限りがある

* 日本でこれをはっきり言うと「炎上」する

約30年前厚生省（当時）の官僚「私が山田君と同じ事を言ったら首が飛ぶ」

自治体の報告書から「収入が少ない男性は恋人もいないし結婚もしてない」削除

一昨年の経団連での山田の講演のサイト 炎上

1. 少子化が深刻化する日本の現実

■ 少子化対策のタブー

少子化対策に必要なこと

「収入が不安定な男性でも女性に選ばれるようにする」

（収入が不安定な男性をなくすことー今の経済では無理？）

これにつながる政策を行わなければ、少子化対策にはならない

（男性育休充実すれば未婚女性は収入が不安定な男性と結婚するのか？）

* 欧米は、収入が不安定な男性でもパートナーが得られる

理由 独身女性は1人暮らし、お金より恋愛感情重視、
社会保障で生活は安定

2. 戦後日本の結婚の展開

- 結婚の二つの意味

- ① 経済的側面

- 経済的に新たな生活をスタートさせる

- ② 心理的側面

- 好きな人と一緒に暮らす

- (同性結婚の場合も同じ ②が同性だけ)

現代日本社会

①の実現が困難になり、②の面も弱くなっている。

2. 戦後日本の結婚の展開

* 経済面からみた結婚 生活水準の変化を伴うイベント

①独身時代の生活と比べ、結婚後の生活がよくなるかどうか

- 生活レベルの落ちる結婚はしたくないという意識

②自分が育った以上の環境を、子どもに提供できるかどうか

- 子どもにつらい思いをさせたくないという意識

* 世間体意識が強い日本では、特に②の側面が重要である。

2. 戦後日本の結婚の展開

- 結婚難の構図

- * —1980年頃まで

- 結婚すれば、「今以上」、「親以上」の生活が期待できた
子どもを自分以上に育てることができた

- * 1990年以降

- 結婚しても、「今以上」、「親以上」の生活が送れないかも、
という不安、

- 子どもを自分以上に育てられないという不安 強まっている

2. 戦後日本の結婚の展開

《1980年頃まで結婚が容易にできた理由》

- ① 経済的な心配はなかった
- ② 出会いが容易だった
- ③ 恋愛へのあこがれがあった

✓ 恋愛にあこがれて、好きな人と出会って、「男が主に仕事、で豊かな生活」可能な経済条件があった

2. 戦後日本の結婚の展開

＊ 1990年代以降、中流転落不安

- 日本人は「生活リスクー中流生活から転落する可能性」を大変嫌う
- 子どもに豊かな生活や十分な教育を保障したいから、それが実現しないリスクが高いと思えば、結婚しない、子どもをもたない、子ども数を少なくするという選択がとられる。

理由 ① 豊かな経済環境で育った子が成人し、親と同居している

→ 自分以上の経済、教育環境のハードルが上がる

② 格差社会 若年男性の経済格差拡大

→ 収入が子どもにお金をかけるには十分ではない男性増える

2. 戦後日本の結婚の展開

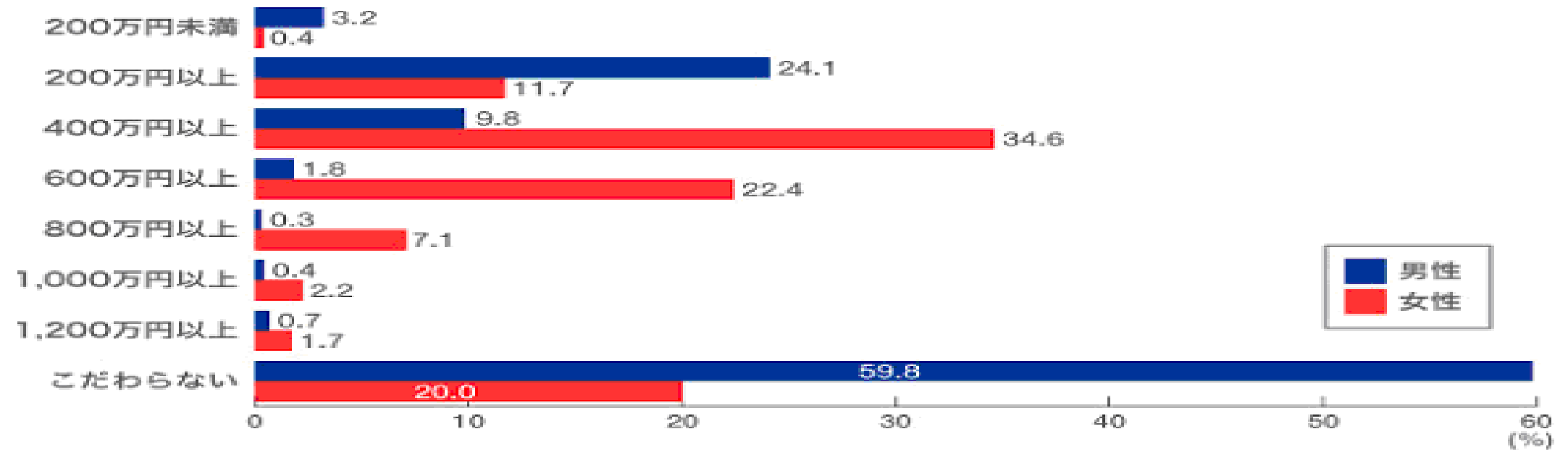
《近年の未婚化の理由》

- ① 経済的な不安
- ② 出会いの減少
- ③ 恋愛へのあこがれ消失

✓ 恋愛へのあこがれが低下し、未婚の異性が周りにいないし、
「男が主に仕事で豊かな生活」を送る見通しが無い

結婚相手に望む年収と現実の未婚男性の年収の比較

結婚相手に望む年収



現実の未婚男性の年収



出所：明治安田生活福祉研究所・「生活福祉研究」号。データは2009年の「結婚に関する調査」（全国ネット20～39歳、4120名の未婚者が回答）

② 朝日新聞世論調査部（2018 年 12 月調査）

(%、件)

	関係ない	200 万 以上	400 万 以上	600 万 以上	800 万 以上	1000 万 以上	(N)
男性	64	18	14	2	0	1	(516)
女性	19	18	41	15	4	3	(516)

(注) 対象者は 25～34 歳、ネットサンプル、男性 516 人、女性 516 人。

(出所) 朝日新聞世論調査部（朝日新聞 2019 年 1 月 13 日朝刊）。

定員が足りない → 「バスに乗り遅れるな」、と早くバスに殺到（婚活）
しかし、バスの定員は変わらない 結婚できない人の数は変わらない
「では、バスを諦めて別の手段を探そう」とはならない

資料 発言小町より

資料1. 発言小町 2025年8月1日の投稿「娘の縁談について」より

「一緒に暮らしている40代の娘について相談です。娘はおとなしく、体が弱く、アルバイトのままご縁を掴めずこの年になってしまいました。近頃久々に縁談があったのですが、お相手の年収が400万円というのが気に入らないそうで、会わないと言っています。同年代の真面目そうな人だし、会うだけ会ってみればと言っているのですが、嫌だそうです。400万円ならやりくりすれば夫婦二人で慎ましく暮らせるのではないか、足りなければパートをすればいい、という、結婚しても働くなら意味がない、ママは専業主婦だったのに、と言います。先々のことを考えると、心配でたまりません。なんとか説得したいので、お知恵をお貸しください。」（<https://komachi.yomiuri.co.jp/topics/id/1213804/> 参照

3. 日本の少子化対策はなぜ失敗したか ー 欧米モデル適用の陥穽

- 日本の家族意識、価値観の文化的背景 欧米との違い
 - ① パラサイトシングル 自立志向の弱さ
 - ② 女性にとって、仕事による自己実現という意識の弱さ
 - ③ 恋愛感情(ロマンティック・ラブ)の弱さ
 - ④ 子どもの将来に対する「責任意識」の強さ
 - ー「子どもにみじめな思いをさせたくない」

表、男女交際の不活発化(欧米との大きな違い)

- 表 独身者で交際相手をもつ率の変化 18歳-34歳
- (国立社会保障・人口問題研究所 出生動向基本調査より 数字%)

	1992	1997	2002	2005	2010	2015	2021
男性							
• 恋人あり(含む婚約者)	26.3	26.1	25.1	27.1	24.5	21.3	21.1
• 交際中の異性の友人あり	19.2	15.3	11.3	14.0	9.4	5.9	4.7
女性							
• 恋人あり(含む婚約者)	35.4	35.4	37.1	36.7	34.0	30.2	27.8
• 交際中の異性の友人あり	19.5	15.9	12.4	12.9	11.9	7.7	6.0

3. 少子化対策はなぜ失敗したか 日本社会のリスク回避(安定)志向、世間体意識

- 日本特有の社会意識

- ①将来の生活設計に関するリスク回避意識

- 日本人は、将来にわたって中流生活を維持することを至上命題に
- 「**中流生活から転落するリスク**」のある結婚はしない

将来、中流生活が送れないリスクのある可能性があるのと、結婚を回避し、男女交際も回避する(恋愛衰退の理由)

(恋愛、結婚、出産、子育ては日本人にとって一連のイベント)

(「奨学金を借りている人とはつきあってはいけません」)

- * 「娘」の親は特にこだわる

- * 現在の短期的リスク回避を優先し、長期リスクは考えない(財政も)

3. 少子化対策はなぜ失敗したか 日本社会のリスク回避(安定)志向、世間体意識

- ② 世間体意識 — 「人からのマイナス評価を避けようとする意識」
- 日本社会に生きる日本人は、「世間体」を保つこと＝「人並みの中流生活」をして、周りの人からみて恥ずかしくない生活をするのが最優先事項
 - 仲間集団、親戚からみてレベルが落ちたと評価される結婚、子育ては避ける。
 - 特に、子どもにづらい思いをさせるような子育て環境は、恥ずかしいから避ける
「お金がないから子どもに買ってあげられない」避けたいと思う
- * 娘の親は特にこだわる

3. 少子化対策はなぜ失敗したか 日本社会のリスク回避(安定)志向、世間体意識

- ①将来の生活設計に関するリスク回避意識
- ②世間体意識 — 「人からのマイナス評価を避けようとする意識」

「将来、結婚して、子どもを育て、老後まで、中流生活が送れない
＝ 他人に比べて見劣りがする可能性が少しでもあれば、結婚しない。
そういう人が現れるまで親元で待つ」

* 1990年以降、この不安が広がる → 未婚化、少子化
2020年のコロナ渦によって増幅している

3. 少子化の対策はなぜ失敗したか ー 欧米モデル適用の陥穽

* 日本まとめ

- ① 結婚前は親と同居している。同居(依存)は、非難されることはない。
 - ② 女性差別がある職場、まだまだ多い(特に地方中小企業)。仕事を続けるよりも、豊かな生活をし、子どもを立派に育てる方が重要と思われる。
 - ③ 恋愛感情は重視されない。愛情であれば配偶者より子ども、夫婦であれば愛情よりも経済生活を優先する。(世間体が悪い結婚はしない)
 - ④ 将来にわたる子育ての責任がかかり、子どもの将来を優先する。恋愛感情に身を任すよりも、これから育てるであろう自分の子どもの教育の経済条件を第一に考える。(リスクのある結婚はしない)
- これらの事情があるために、「両立支援」を中心とした少子化対策は、「空振り」に終わる。

親の意識が変わらない例

1. 人生相談(読売新聞)から — 60代女性(主婦)「20年前、娘が連れてきた**男性の収入が高くなかった。娘のためにと、大反対**して諦めさせたが、その後よい縁がなく、娘は40代独身、このままだと将来が心配、どうしたらよいか？」
2. 地方親同居未婚者調査(約20年前)から 60代女性(農業)「私は中卒だけど、短大出た私の知り合いはお金持ちの奥さんになっていったので、無理して**娘には短大に行かせた。だから、お金持ち以外とは結婚させない**。家は農地改革で財産(どうやら農地らしい)がある、どうして息子に嫁が来ないのかわからない。(娘さんが農家に嫁ぐというのはと聞いたら)娘には、絶対私と同じような農作業はやらせない。農家ならお手伝いさんがいるところであればー。なんで二人(30代後半)とも結婚できないのか分からない」

親の意識が変わらない例

3. 地方の仲人調査(小澤千穂子・大妻女子大名誉教授)から。「あるお嬢さんがいる家に、いい人だけど契約社員の男性の釣書を持って行った。親から、一なんでうちにこんな男を紹介するんだ、**もっと高収入の男性を持ってこい**、そうでなければ絶交だ—と言われた。収入の高いどころか正社員独身男性なんて、こんな地方にもう残ってないのに。昔はよかった」
4. 地方独身者調査 「ある女性とつきあいだして、親に紹介したら、**—あそこに住んでいる人とはつきあってはいけない—**と反対された。」
5. 学生アンケートより「母親から、**—奨学金を借りている人とはつきあってはいけません—**と言われた」(今は半数の大学生奨学金貸与)

*** 何でうちの子が結婚できないんだと嘆き続ける60代続出**

暫定的結論

- 子どもに惨めな思いをさせたくない という意識が続き
- 子どもの経済・教育環境は親が整えなくてはならないという現状が続き、
- 若年男性の経済格差が拡大したままで、
- 女性差別で、十分な収入や職業継続が難しい中で(特に地方)
- 男性が主に家計を支えるという意識が続き
- 親が多くの未婚の若者(特に女性)を経済的に支えており、
- 将来の大きな経済成長が望めない(と信じられている)限り
日本の若者は子どもを多く産み育てようとは思わない。



* * 「収入が不安定な男性をどのようにして結婚までもっていくか そのような男性と結婚しても大丈夫という女性をどう増やすか」にかかっている。

特に、地方の「婚活支援団体」はこれに腐心している。

4. 有効な少子化対策はあるのか？

少子高齢化は、日本の経済・社会が変化しているのに、制度、慣習、意識がなかなか変わらないため

「収入が不安定な男性」の結婚を推進するために必要な施策

1. 男女共同参画の更なる推進

「男は仕事、女は家事」に反対する低収入男性は結婚しやすい
(高収入男性は効果なし)

2. 多様な家族を認める(夫婦別姓、同性愛カップル)

跡継ぎ女性 婚活で婿養子を求めるが、そんな男性ほとんどいない
→ 別姓を選択できれば結婚相手の範囲が広がる
レズビアン女性、子どもを育てているカップル、日本でも増加

3. 社会保障による「子育て」の下支え

結婚生活を始める事への経済支援
子どもを育てている事への経済支援(高等教育の学費等まで)
ひとり親支援

4. 有効な少子化対策はあるのか？

意識はなかなか変わらない

欧米と異なった意識は、欧米のように変わるのか？

1. 結婚前は親同居 → 親は子どもに自立を促す（特に女性）
一人暮らししていれば、二人で生活した方が経済的にプラス
2. 女性が収入の安定した男性を求める → 男性と対等に稼ぐ。
女性の収入が安定していれば男性を収入で選ばなくなる
3. 結婚生活にはお金が大事 → お金よりも愛が大切
相手と一緒に暮らせれば貧乏でも幸せ
4. 子どもに辛い思いをさせたくない → 子どもは子ども
子どもの将来の学費は考えなくてよい。

*** このように意識が急速に変わるとは思えない**

4. 有効な少子化対策はあるのか？

- 対策はあるのか

二つの対策(少子化緩和と少子化の結果への対応)が必要

- ① 若者に結婚し、子育てが負担にならない条件を整える

「経済的安心」どんな仕事についていても、誰と結婚して子どもを育てても、将来中流生活が送れる保証を

結婚、恋愛サポート 特に収入が不安定な男性に対する支援

子どもの教育費が負担にならないような支援

- ②ー1 中高年独身者が孤立せずに生活できる条件を整える

中高年独身者の居場所作り（中高年婚活、グループホーム）

- ②ー2 介護労働力不足への対策 移民、女性労働、高齢者労働の促進

4. 有効な少子化対策はあるのか？

- ・ 福山市の個別事情と対策の可能性

- ＊ 福山市 他自治体と比較して、出生数減少のスピードは遅い
離婚割合（婚姻件数に対する離婚件数の割合）が比較的高い

仮説 JFEの存在一男性の安定雇用
接客を伴った飲食業女性の存在

- ① 若者に結婚し、子育てが負担にならない条件を整える

JFE正社員と非正規社員、下請け中小企業の格差？

結婚、恋愛サポート 特に収入が不安定な男性に対する支援

子どもの教育費が負担にならないような支援

- ＊ 自治体の結婚支援では、収入や職業を理由として男性の入会を断れない

→ AIマッチングなど、自分ではなく、何かに選んでもらうタイプの支援策が効果的に機能する可能性

- ＊ また「女性は嫁となり婿家に尽くす」「男性が稼いで、女性が家事」という従来型の家族の枠組みにとらわれない、新たな試みで成功している自治体もある（具体例はp.30参照）

→ 男性のみが家計を支えるという考え方を脱すれば、道は開けてくるはず

4. 有効な少子化対策はあるのか？

* 地方における男女共同参画の推進の必要性

都会に出て行ってしまいうやる気のある地方出身の女性

地方に残れば、差別的仕事環境、収入が高い男性少ない

* 福山市の特殊事情

JFE関連ではない若者の増大は必須

* 住宅支援 JFE正社員ではない、新婚家庭に住宅費補助、子育て家庭には手厚く

* 女性活躍推進 女性が差別なく働ける職場をたくさん用意する

* 飲食接待業などに就く女性、特にシングルマザー支援

4. 有効な少子化対策はあるのか？

好事例もあるが、まだ、「点」にとどまっている

そのポイントは、従来の「女性は嫁となり婚家に尽くす」「男性が稼いで、女性が家事」という従来型の家族の枠組みにとらわれない考え方をとるところにある。

農家の嫁ではなくて、「牧場の共同経営者」募集、男性の両親とは別居をうたい文句に成功している自治体もある。あるケースでは、農家の男性が、「自分が家で子どもをみるから、あなたは外で自由に仕事をもってよい」と口説いて結婚したというケースにも出会った。今、農業や伝統産業に興味をもっている若い女性が増えている。工夫すれば、若い女性をひきつけることができる。

また、趣味が一緒に意気投合し、契約社員同士だが共働きで頑張れば楽しい家族生活を送っているという夫婦にもインタビューしたことがある。**男性のみが家計を支えるという考え方を脱すれば、道は開けてくるはずである。**それには、女性差別的環境をなくす必要があるが。

また近年、シニア婚活をする人も増えている。このまま、中高年の独身者がパートナーを見つけることによって孤立状態から脱することができる。少子化対策だけでなく、「孤立化対策」として、中高年独身者の結婚支援を行うことが今後自治体の結婚支援に必要だと考えている。にとどまっている

5. 幸せに衰退する日本(以下はおまけ資料)

ビル・クリントン元米大統領 演説

過去は過去、過去を追い求めると未来を失う

(Yesterday is yesterday. If we try to recapture it, we will lose tomorrow)

ただ、未来が明るいとは限らないから、

我々は過去(成功体験、伝統意識)にしがみつきたくなる

* 未来のため、痛みを伴った少子化対策、女性の活躍の推進
出来なければ、日本社会は緩やかに衰退する

5. 幸せに衰退する日本

* 幸せに衰退する日本の将来

十分な少子化対策が出来なかったときの未来

四分の三の若者 結婚して子ども二人弱持つ(三分の一は離婚)

ぎりぎりの生活だけど家族作れて幸せ

四分の一の若者 独身のまま

家族なくてもバーチャルがあるから幸せ(それ位のお金はある)

社会問題は、アドホックに官僚が対処(無縁社会対策)

* 東京と地方の差が拡大する

若い元気な女性 女性差別を嫌って東京に出て結婚、出産

地方は、男女差別意識が高い所から順次衰退、消滅か？

5. おまけ

* 第72回 男女共同参画会議議事録(首相官邸) 2024年

○山田議員 山田でございます。私は、前回に引き続いて、地域における女性活躍・男女共同参画の推進について、申し上げたく存じます。骨太の方針に、地域における女性活躍の重要性を相当書き込んでいただいて、ありがとうございます。私は、卒業生の話聞くことが多く、1つ、エピソードを御紹介させていただきます。彼女は、現在、東京におりますが、先日、地元の本家の法事に出席したそうです。その宴会では、男性は全員上げ膳据え膳で飲み食いする一方、女性は働いている人も働いていない人も年齢にかかわらず料理の支度やお酌に駆り出される様子を見て、「もうこんな地元には二度と帰らない」という決意を新たにしましたそうです。骨太の方針に書かれているように、地方の中小企業などで女性の雇用や活躍を支援することはもちろんですが、案外、地方に根づく男尊女卑の慣習が若年女性を地方から遠ざけてしまう原因になって、その結果、若年女性が離れてしまえば、結婚・出産の絶対数も減りますので、人口減少が加速化し、地方が衰退するという影響も見逃せません。前回も申しましたが、東京では、もちろんまだ不十分だという声も大きいですが、女性の活躍の場が確保されやすいために、子供の数はそれほど減っていません。一方、地方では、子供の数が激減しております。もちろんアンコンシャス・バイアスの解消に向けて啓発に取り組むということが書きこまれています。ぜひ、地方に在住しているこのような中高年の男性に若い女性の声を届けて、いまだに根強い男尊女卑慣習をなくすようにするさらなる啓発活動が必要だと考えます。もう一つ、例を挙げますと、昨年、地方の企業に正社員で内定していた女子学生が、入社企業の男尊女卑風土に嫌気が差して内定を断って、海外に行ってしまいました。私は、10年ほど前に海外で結婚した日本人女性調査をしているときに、日本の女性差別を嫌って海外に渡った女性の話を多く聞きました。つまり、若い女性を活躍させないと、地方だけではなく、日本を見限る女性が今後とも増えていくおそれがあると考えております。日本の発展のために、ぜひ伝統的な慣習を含めた見直しを広げていただくようお願い申し上げます。以上です。

* 一学生曰く「中高年のおじさん、このまま伝統的な制度・社会と一緒に心中させてあげるのが幸せなのでは」

* 私の予言であると共に遺言かもしれない。(私の平均余命17年)